様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１２２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０５７５

研究課題名（和文）JSL児童生徒への教科学習支援におけるパラフレーズの活用―文章理解を中心に―

研究課題名（英文）A Methodological Study on the Application of Paraphrasing to Subject Learning Support for Students of Japanese as a Second Language: Focusing on Text Comprehension

研究代表者
鎌田　美千子（Kamada, Michiko）

宇都宮大学・留学生・国際交流センター・准教授

研究者番号：４０３７２３４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：日本語を第二言語とする児童生徒（以下、「JSL児童生徒」）が在籍する学校では、日常会話レベルの日本語から教科書レベルの日本語への橋渡しが課題となっている。本研究では、JSL児童生徒への学習支援のあり方とその方法をパラフレーズ（言い換え・書き換え）の面から検討した。教科書の文章のリライトを取り上げ、背景知識に配慮した調整が必要であることを、教員、指導補助者、大学生ボランティアを主な対象としたワークショップを通して提示した。

研究成果の概要（英文）：To bridge the gap between spoken Japanese in conversations and written Japanese in textbooks is one of the most important tasks that schools must undertake when they have students of Japanese as a second language attending classes. The purpose of this study is to discuss issues relating to support their learning from a methodological perspective. This study considered the role of paraphrasing in creating rewritten teaching materials. At the end of the study, we designed and conducted workshops for people from the educational field by presenting the results of this study.

研究分野：応用言語学、日本語教育

キーワード：パラフレーズ　言い換え　書き換え　リライト　文章理解　言語習得　第二言語　日本語教育

１．研究開始当初の背景

日本語を第二言語とする児童生徒（以下、「JSL 児童生徒」）が在籍する学校では、日常会話ができるようになった後の読み書きの問題が課題となっている。そのため、教科の学習を支援する方法の一つとして、複雑な表現を取り除いたパラフレーズ（言い換え、書き換え）、いわゆる「やさしい日本語」が広く使われている。

一方で、年齢が上がるにつれて文章を通して知識を獲得する機会が増えていくことをふまえて考えると、母語保持とあわせて、いずれは自分ひとりで読めるレベルにまで近づけていくことが望ましい。特に教科書は、教科学習に最も密接な位置づけにあり、教科書が読める程度の読解力を育成していくことは、重要な課題である。

こうした課題に対する一つのアプローチとしてリライト教材が挙げられる。リライト教材とは、「発達段階に応じた思考ができるように、子どもの日本語力に対応させて、教科書本文を書き換えた教材」（光元・岡本, 2012, p.3）を指す。市販されているものは少なく、多くの場合、指導側によって作成されている。また、国語教科書を対象としたものが多い。

実際、作成にあたっては、個々の表現の難易に注意が払われ、全般的に短い文や文章のほうがよいという意識が広く見られる。その一方で、文や文章を短くすると、本来の情報が単純化され子どもの知的好奇心に必ずしも応えられないといった問題や、内容面でのわかりにくさといった問題も見られる。したがって、個々の表現の難易を調整するにとどまらず、文章理解のプロセス自体にも着目した支援のあり方を検討する必要がある。

文章の理解には、個々の表現の理解（ボトムアップ処理）と、文章全体にわたる意味構築（トップダウン処理）とが相互に関与する（Stanovich, 1980）。前者に関する検討は、これまで「やさしい日本語」研究においても蓄積されてきたが、後者に関しては、まだあまり検討されていない。そこで、本研究では、後者の視点を含めて教科書レベルの読みへの移行を支えるために、取り出し指導終了後の「口頭による説明は理解できても教科書の文章が理解できない」といった段階での学習支援におけるパラフレーズのあり方と方法を検討することにした。

以下では、もとの文章全体を書き換えること及び書き換えた文章全体を「リライト」と呼び、その書き換える過程で部分的に言い換える（書き換える）こと及び言い換えた表現（書き換えた表現）を「パラフレーズ」と呼ぶ。

２．研究の目的

本研究では、JSL 児童生徒への学習支援のあり方と方法をパラフレーズの面から考察し、実際に学習支援に携わっている、またこれから携わる教員、指導補助者、大学生ボランティア等に向けてパラフレーズの着眼点と留意点、具体的な活用方法を提示することを目的とする。教科書の文章のリライトに焦点を当て、初心者でも取り組めるような形態での提示を目指す。

３．研究の方法

上述した研究目的を達成するために、以下の点から支援方法の具体化を試みた。

(1)方法論的枠組みに関する検討
(2)学習支援方法に関する検討
　①社会科及び理科教科書の分析
　②リライトの分析
　③「リライト作成タスク」の設計
　④リライト試案の作成
(3)ワークショップの実施と改善
　①ワークショップの構想と教材作成
　②ワークショップの実施
　③ワークショップの改善

４．研究成果

(1)方法論的枠組みに関する検討

背景知識を活性化することは、児童生徒のリテラシーを深める上で重視されており（Cummins,2009）、取り出し指導においても、例えば視覚的な補助教材や具体物を使う、体験的な活動を行う等、口頭での問いかけや補足がなされることが多い。松田他（2009）や光元（2014）による教育実践が示すように、取り出し指導でリライト教材を使う際にも同様の傾向が見られる。これに対して、取り出し指導終了後に焦点を当てた本研究では、背景知識の不足を口頭で補うよりもむしろ読むことに比重を置いた学習支援の必要性が示唆される。とりわけ小学校高学年以降は、読み書きを意識した学習の比重が増すことからも、上述した方法論とは別の枠組みが必要である。

読むことに比重を置いた支援方法を考えるにあたって、文章理解に関する諸研究を概観すると、国語科教科書の文章と社会科及び理科教科書の文章を分けて考えるのが妥当である。Kintsch（1994）は、文章理解の様相を「テキストの学習（learning of text）」と「テキストからの学習（learning from text）」といった二つの概念で説明している。「テキストの学習」とは、書かれている内容を読み取ることを意味する。「テキストからの学習」とは、読み取った内容を知識に取り込むことを意味し、背景知識との関係が深い。小嶋（1996）によれば、「テキストの学習」は国語科教科書の文章と対応し、「テキストからの学習」は社会科及び理科教科書の文章と対応する。

教科書の文章は、日本人児童生徒を読み手として想定していることが多く、日本での生活経験が少ない JSL 児童生徒の場合、背景知識の不足が予想される。社会科及び理科教科書の文章は、国語科教科書の文章に比べて比

較的短いことからも、上述した点への配慮が必要である。

他方、これまでのリライト作成上の手引きでは、ボトムアップ処理の調整に偏り、トップダウン処理の調整に関してはあまり触れられていない。例えば光元・岡本（2012）では、文体（敬体・常体）、単文・複文、使用語彙、キーワード、漢字、複合動詞、受身・使役表現、連体修飾表現、接続表現等に着目したパラフレーズ方法が示されている。また、一文の長さは「五文節程度」（p.19）とされている。これは、第二言語による読みへの抵抗感を軽くするためでもあるが、実際に短い文や文章が必ずしもわかりやすいとは限らない。文字情報が減れば、推論を要する度合いが高まるため、話題に関する知識がないと、逆にわかりにくくなる可能性がある。したがって、リライト作成にあたっては、文章に明示的に書かれていないようなディスコース上の意味をいかに反映させるかが重要な観点となる。

以上のことをふまえて、本研究では、文章理解におけるトップダウン処理の難しさを軽減する上で背景知識に留意したパラフレーズに焦点を当てて検討することとした。

(2)学習支援方法に関する検討

上記(1)をふまえ、①社会科及び理科教科書の分析、②リライトの分析、③「リライト作成タスク」の設計、④リライト試案の作成を通して具体的なパラフレーズ方法を検討した。以下、順に述べる。

①社会科及び理科教科書の分析

社会科及び理科教科書の各単元における中心的な学習項目の後に発展的・応用的な読み物として掲載されている文章を主な対象とした。この種の文章は、授業の中で主要な学習項目ほどあまり詳しく取り上げられないことが多く、自律した読みが求められる。また、日本で生まれ育って得た生活経験が前提となっていることが少なくない。そこで、該当する記述を抽出し、以下の A-1～B-4 に類型化した上で、ワークショップで使用する教材を作成するための基礎的資料とした。

A．トップダウン処理に関するもの
- A-1 記述が具体的でも日本での生活経験等に関する情報が不足しているもの
- A-2 記述が抽象的なもの（事例を含む）
- A-3 その他

B．ボトムアップ処理に関するもの
- B-1 和語動詞の多義性
- B-2 省略
- B-3 比喩
- B-4 その他

また、社会科及び理科教科書の文章に見られる日常語の問題に関しても考察した。ある表現を別の表現に言い換えるだけでは必ずしもわかりやすくならない事例を複数検討した結果から、背景知識をリライトに含めることによりディスコース上の意味を明示できる可能性が示唆された。

②リライトの分析

初心者にもわかりやすいリライト方法の検討にあたって、リライト経験が１回以下の日本語母語話者による、社会科及び理科教科書のリライト２種 24 編におけるパラフレーズを分析した。リライトの素材とした文章は、いずれも単元の学習の後に発展的・応用的な読み物として提示されている文章であり、社会科 176 字、理科 139 字である。

リライトは、a）個々の表現を忠実に書き換えても全体としてあまり読みやすくなっていないケース、b）パラフレーズによって新たな読みにくさが生じているケース、c）書き換えたほうがよいと判断していても適切な表現が見つからずに原文の表現を残すケース等が見られた。いずれも共通して、背景知識がパラフレーズに反映されにくい傾向があった。

こうした傾向から、背景知識を含めたディスコース上の意味にも着目することを作成上の留意点として示す必要があることが示唆された。

③「リライト作成タスク」の設計

研究成果を実際に活用しやすい形式で示すために、最終年度に予定しているワークショップの一部で扱う教材「リライト作成タスク」として具体化した。本タスクでは、作成側が教科書の文章を複眼的に捉えることができるようになることを目指した。概要は、次の通りである。

〔主な対象〕：JSL 児童生徒の学習支援に携わっている、もしくはこれから携わる教員、指導補助者、大学生ボランティア等。

〔文章〕：社会科及び理科教科書の各単元における中心的な学習項目の後に発展的・応用的な読み物として掲載されている文章。

〔タスクの前に（全体）〕：①パラフレーズの着眼点と実例を検討する、②背景知識を含めたリライトと背景知識を含めないリライトを比較検討する。

〔タスク〕：外国人生徒 A 君は、日本語の日常会話にほとんど問題がなく、今は日本語教室での取り出し指導を受けていない。授業中の説明は概ね理解できているようだが、自分で教科書の文章を読んで理解することは難しい様子である。あなたは、A 君がわかるように、教科書の文章を書き換えたプリントを作成しようと考えている。（次の教科書の文章を）右側の枠の中に書き換えなさい。

〔グループ討議〕：リライトで背景知識をどのように示したか、なぜそのように示したか、書き換えた表現はわかり

やすいか等について話し合う。
〔ふりかえり〕：意見交換をふまえて書き直そうと思った箇所、次回作成する際に試みたいこと等を挙げ、各自で一連の活動をふりかえる。

④リライト試案の作成
日本語教育の観点から抽象性の扱いについて論じた荻原・齋藤（2010）による枠組みを援用し、個々の表現とディスコースの双方に注目したパラフレーズ方法を考案した。単語や文法といったボトムアップ処理のみならず、スキーマ等のトップダウン処理を支えるために、抽象から具象への三つの段階を想定したパラフレーズ方法を示し、リライトの試案を作成した。リライトの試案では、具体例の挿入によって難易度の調整を図った。背景知識となる補足的な内容を含めることによって、明示的に書かれていないようなディスコース上の意味を反映させることができた。

(3)ワークショップの実施と改善
①ワークショップの構想と教材作成
上述した検討結果を教育現場に役立てるために、教員、指導補助者、大学生ボランティア等を主な対象としたワークショップの内容を構想した。実施に向けてワークショップで使用する冊子体の教材（A４判、全 20 頁）を作成した。

②ワークショップの実施
2015 年 8 月から 11 月にかけて栃木県宇都宮市、山梨県甲府市、北海道函館市、山形県山形市の四つの地域でワークショップ「ことばを言い換えるために知っておきたい三つのこと―教科書のリライトを例に―」を実施した。前者二地域は、JSL 児童生徒が相当数に上る地域である。後者二地域は、JSL 児童生徒が散在する地域である。各回 20 名を定員とし、参加者は総計 67 名に上った。
各ワークショップは、理論と実践の両面から考えることができるように、〔第Ⅰ部 理論編〕と〔第Ⅱ部 実践編〕の二部構成とした。〔第Ⅰ部 理論編〕では、言語習得論、言語心理学、言語教育の知見に基づき、まず、子どもが文章を読めるようになるまでの各段階について概説した後、関連する例文とともに文章理解のプロセスの諸相を示した。日本人児童生徒の生活経験が前提に書かれているために表現が省略されている事例、また個々の単語の辞書的な意味を理解できたとしてもディスコース上の意味が解せない事例を複数取り上げ、参加者との意見交換を交えながらパラフレーズの留意点を確認した。〔第Ⅱ部 実践編〕では、参加者４～５名のグループに分かれ、前述した「リライト作成タスク」に取り組んだ。ほとんどの参加者が初めてリライトに取り組むことを考慮してグループ討議と全体討議を交えながら段階的に進めた。最後に、全体を通した意見や感想を参加者に述べてもらい、各自の疑問や工夫を共有した。

③ワークショップの改善
各ワークショップ後のアンケート及び参加者との意見交換の結果をもとに改善を図った。
アンケートの選択式質問では、「とても役立った」76.9%、「役立った」23.1%、「あまり役立たなかった」0.0%、「役立たなかった」0.0%と総じて良好な評価が得られた。自由記述においても、「共感できる部分や新しい発見があり、とても参考になった」「今後、子どもたちとかかわる中で、今回の経験をぜひ生かしていきたい」「今後に役立てたい」等の肯定的な回答が数多く寄せられた。また、「わかりやすい言葉や具体例があると長くなっても伝わりやすくなることに気づかされた」「実際に体験したり意見交換したりできたので学びが深まった」「リライトを作成することで、どのような点に気をつけたらよいのか、どうすればもっとわかりやすくなるのかということを考えるきっかけになった」といった回答から、参加者各自の学びにつながったと思われる。さらに、「日本語教育の場面だけでなく、様々な場面で役に立つと思う」「実際の日常会話などにも活かそうと思う」といった回答も見られた。
改善点としては、回を重ねる中で、時間配分を見直し、グループ討議の時間を十分にとる、他のグループの話し合いの結果を聞く時間を設けるといった要望を反映させた。また、グループ討議の論点がより明確になるように、リライトの素材となる文章を一部変更した。
全４回のワークショップ実施後、報告書（A４判、全 67 頁）を発行し、関係諸機関等に送付した。本ワークショップの開催及び報告書の発行は、参加者相互のネットワーク構築にもつながった。

(4)総括
本研究では、日常会話レベルの日本語から教科書レベルの日本語への移行をいかに支えるかといった問題にパラフレーズの面からアプローチした。研究期間全体を通じて得られた成果を実際に活用しやすい形式に整えて具体化したこと、またワークショップ参加者間の対話を通して各自の経験や工夫を共有したことにより、実践可能な方法論を提示することができた。今後は、リライトにおけるパラフレーズの効果を検証し、実際の教科学習支援に役立てていきたい。

＜参考文献＞
小嶋惠子（1996）「テキストからの学習」波多野誼余夫編『認知心理学５ 学習と発達』東京大学出版会，pp.181-202.
荻原稚佳子・齋藤眞理子（2010）「意見述べ

における抽象性―その表れ方と教育への指針―」『日本語 OPI 研究会 20 周年記念論文集・報告書』，日本語 OPI 研究会，pp.121-131.
松田文子・光元聰江・湯川順子（2009）「JSL の子どもが在籍学級の学習活動に積極的に参加するための工夫―リライト教材を用いた『日本語による学ぶ力』の育成―」『日本語教育』142，145-155.
光元聰江（2014）「取り出し授業と在籍学級の授業とを結ぶ『教科書と共に使えるリライト教材』」『日本語教育』158，19-35.
光元聰江・岡本淑明（2012）『外国人・特別児童生徒を教えるためのリライト教材改訂版』ふくろう出版
Cummins, J. (2009). Fundamental psychological and sociological principles underlying educational success for linguistic minority students. In T. Skutnabb-Kangas, R. Phillipson, A. K. Mohanty, & M. Panda (Eds.). *Social Justice through Multilingual Education*. pp.19-35. Bristol: Multilingual Matters.
Kintsch. W. (1994). Text comprehension, memory, and learning. *American Psychologist*, 49(4), 294-303.
Stanovich, K. E. (1980). Toward an interactive-compensatory model of individual differences in the development of reading fluency. *Reading Research Quarterly*, 16(1), 32-71.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

①鎌田美千子（2015）「第二言語としての日本語によるパラフレーズの諸相」『第二言語としての日本語の習得研究』18 号，135-149,（査読有）

〔学会発表〕（計３件）

①鎌田美千子「JSL 児童生徒への教科学習支援を目的としたリライト試案」，第 10 回 OPI 国際シンポジウム，2015. 7.31-8.2，函館国際ホテル（北海道函館市）

②鎌田美千子「教科書のリライトにおけるパラフレーズの分析」，International Conference on Japanese Education 2014, 2014. 7.11. － 7.12. , University of Technology (Australia).

③鎌田美千子「JSL 児童生徒への学習支援を目的としたリライトにおける背景知識の扱いとその課題」，異文化間教育学会第 35 回大会，2014. 6. 7.－6.8.，同志社女子大学（京都府京都市）

〔図書〕（計１件）

①宇都宮大学国際学部編（2014）『世界を見る 38 講』下野新聞社（全 211 頁，分担執筆 pp.113-117.）

〔その他〕

①鎌田美千子（2016）『日本語教育ワークショップ報告書―ことばを言い換えて伝えるために知っておきたい三つのこと―』宇都宮大学鎌田美千子研究室

６．研究組織

(1)研究代表者

鎌田美千子（KAMADA, Michiko）
宇都宮大学・留学生・国際交流センター・准教授
研究者番号：40372346

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

仁科浩美（NISHINA, Hiromi）
山形大学・大学院理工学研究科・准教授
研究者番号：10431644